

〔講演要旨〕 領主別被害合計資料から被害が起きた 個々の集落を推定する方法

一元禄地震(1703)の詳細震度分布推定研究への応用一

都司嘉宣・上田和枝・伊藤純一(地震研究所)

房総半島での元禄地震の集落別詳細被害を記録した「楽只堂年録」には、村名が明記されていないで被害数字だけが書かれている記事がある。このような記事は二種類に分類することができる。第1種のもは、村名は書いてないが、その村の領主と石高と被害数が記録されているもの、第二種のもは領主の支配する複数の村の被害合計数字だけが記録されているものである。このような記事は従来、現代の地図上に被害の発生地点を解明することができなかつたため、有効に活用することができなかつた。平凡社発行の「日本歴史地名大系・12・千葉県地名」には、江戸時代の村ごとの石高、戸数、支配者の変遷が詳細に述べられている。江戸時代には、安房国は、安房郡(85村)、平郡(74村)、長狭郡(68村)、朝夷郡(65村)、夷隅郡(44村)の5郡336村から成っていた。この336村郡について、データベース化し村名解明作業を行った。

第1種の例:たとえば『楽只堂年録』の原文に「大久保大膳 安房国知行所、村高三百七十六石二斗余場、潰家二百八十三軒、怪我人五人」という記事がある。

データベースで検索すれば、安房国で大久保氏が376石を領した村といえば、朝夷郡川谷(かわやつ)村であり、この場所は、現代の地図の千葉県丸山町川谷(139° 58.1' E, 35° 04.1')で、内陸の集

落あることが判明する。「地名大系」によると、この村は大久保氏が376石余、酒井氏が84石余、幕府が9石余の合計470石の相給の村であつて、大久保氏は全石高のちょうど80%を領していたことが分かる。時代は下がるが天保14年(1843)には家数58、人口293人の村であつた(川谷村明細帳、川谷区有文書)。この場所で「潰家283軒」と記されているのであるから、村の全戸倒壊に近く、この地点で震度6強から7に達していたことが推定できる。

第2種の例:『楽只堂年録』に「京極対馬守知行所安房国長狭郡朝夷郡十一ヶ村、潰家六百八十七、流家百八十六、死四十二人、うち津波死者二十八人」の記事がある。京極氏領の11個の村と言うだけで、それがどこなのかは全く明記されていない。ところが上記データベースによれば、安房国長狭郡、朝夷郡の133ヶ村のうち、長狭郡の太尾、京田、竹平、二子、代野、宮野下、天面、西山の8村(現在すべて鴨川市内)、朝夷郡の大井(現在丸山町)、黒岩(和田町)、吉浦(鴨川市)の11村が元禄16年に京極領であつたことが判明し、上記の被害の発生地点11集落の位置がすべて正確に知られることとなった。後世の天保年間のこの11個の村の家数を合計すると653軒となる。この11ヶ村で685軒の潰家が出たのであるから、おそらくこの11個の集落のほとんどすべての場所で震度6強から7に達していたと推定される。